

畿内における初期横穴式石室の一形式

— 勝福寺古墳北墳・雲雀丘C北4号墳の位置づけ —

岡野 慶隆

1. はじめに

畿内における横穴式石室の研究は、1960年代の白石太一郎氏の初期横穴式石室の系譜や型式編年に関する研究に始まるが^①、以後群集墳としての群構成や被葬者集団の性格とその造墓活動等に関する研究が中心となり、横穴式石室そのものの研究は以外と少なかった。しかし、近年に至り、河上邦彦氏の大和における大型横穴式石室の編年と系譜の研究^②、北垣聰一郎氏による構築技術面からみた研究^③、森下浩行氏による畿内型横穴式石室の出現と編年・分類の研究^④、山崎信二氏による九州・中国・四国・畿内の横穴式石室の地域別比較の研究等がみられる。^⑤とくに森下・山崎両氏の研究では、「畿内型」横穴式石室の設定を行い、各々異なるが編年・分類を試みられている点や、河上氏の研究では、石工集団の想定と技術的な系譜とその政治的背景を論じられている点は注目されよう。ただ、各氏の研究とも須恵器編年にもとづく石室編年が中心となっていることや、「形式」及び「型式」設定が明らかでないこと等、横穴式石室そのものの型式学的研究としては今後の課題が多く残されている。

さて、横穴式石室の型式学的研究に際し、最も基本的な問題点は、各石室資料の比較基準をいかに設けるかということである。適確な比較基準設定は、横穴式石室の型式学的研究を可能とし、この時初めて横穴式石室を考古学資料及び歴史資料として正当に評価し得るものと言えよう。しかし、横穴式石室のもつ要素は複雑で、この比較基準設定作業は容易なことではない。

筆者もこの点に関して、不十分ながらも若干の試みを行ってきた。その一つは、まず石室構築にあたった専門技術者を想定したことと、技術者は当初よりなんらかの企画をもっていたと考え、この企画を復元することにより各石室資料の比較や、石室構築にあたった技術者の系譜を明らかにできると考へた。そして、当初の企画を最も忠実に反映すると考えられる石室の平面形を宝塚市長尾山丘陵の横穴式石室で検討した結果、玄室幅を基準長とし、玄室長・羨道長をその倍数値とする倍数型平面企画法を復元することができた。^⑥また、畿内の大型横穴式石室を対象に検討した場合にも、玄室長を玄室幅のほぼ2倍とするB型企画法が大和を中心として採用されていることが明らかになり、同企画法をもつ技術者集団の広がりとともに、その政治的背景についても指摘することができた。^⑦

しかし、この平面企画は実際の横穴式石室を構成する一要素にすぎないことや、石室の形態を決定する要因がこの他にもあったと考えられるため、再度長尾山丘陵の横穴式石室について検討を試みた。^⑧そこでは、横穴式石室の形態決定要因を企画と構築技法に分けた。企画は、片袖式・両袖式等の構造と平面・立面企画からなり、石室の基本的な構造とおよその比率と寸法がこれにより決定されると考へた。また、構築技法は、細かい平面形や、側壁・奥壁・前壁・袖部等の石

の積み上げ方等で、石室の細かい形態はこれにより決定されると考えた。つまり、形態のために構築技法を選んだというよりも、技術者のもつ構築技法が形態を決定したという考え方である。この結果、長尾山丘陵ではまず構造より、Ⅰ型（右片袖式）・Ⅱ型（両袖式）・Ⅲ型（複室構造）に分類し、さらに時期とともに変遷する構築技法も含めてⅠ期（Ⅰ型、6世紀前半）・Ⅱ期（Ⅱ・Ⅲ型、6世紀中頃～7世紀前半）の2時期に分けることができた。これにより、当丘陵における横穴式石室構築にあたった技術者の系譜やその背景に迫ることも可能となったのである。

ところが、ここにあげた一つの系譜のなかにもさまざまな要素が混在していることや、当丘陵内で型式的に完結しないといった問題点も残された。おそらく、構築にあたった技術者は広い地域で活動し、一つの地域内でも氏族関係によりいくつかの系譜の技術者が混在していたのが現実であろう。

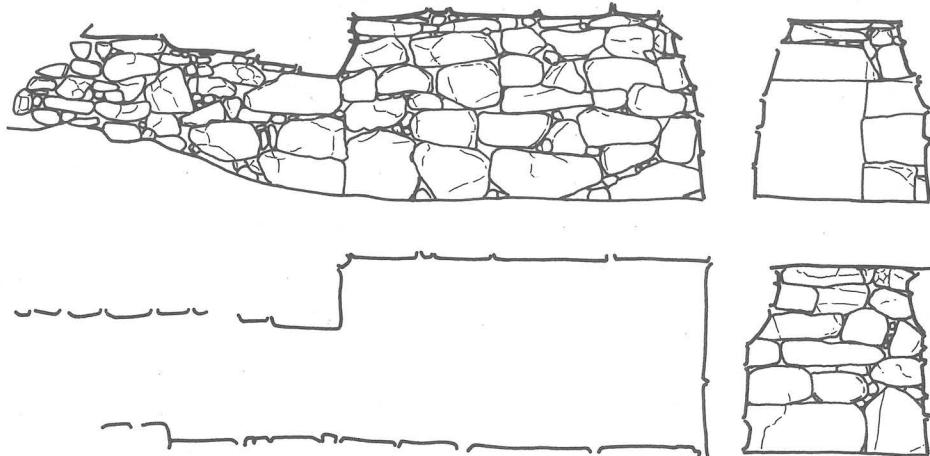
以上の点より、今回は長尾山丘陵の横穴式石室導入期にあたるⅠ期のⅠ型石室である勝福寺古墳北墳と雲雀丘古墳群C北4号墳を対象とし、畿内を中心とした他地域の資料との比較をとおして両石室の構築にあたった技術者の系譜とそれを導入するに至った背景について検討を試みてみたい。

2. 両石室の概要

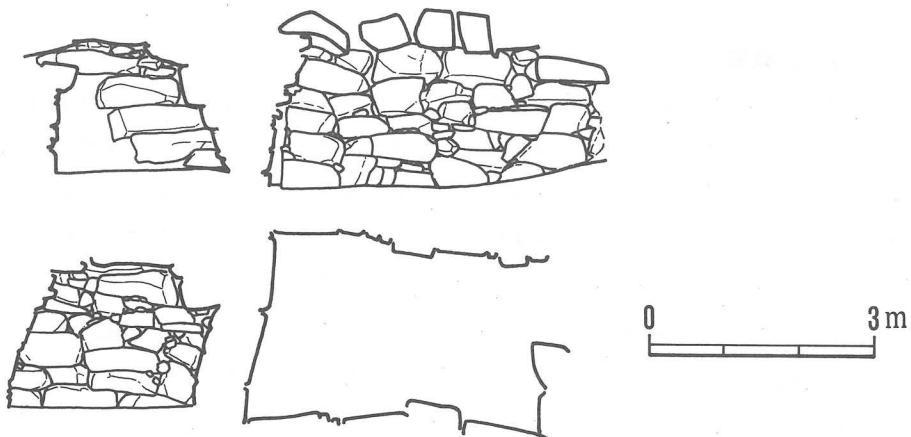
勝福寺古墳は、長尾山丘陵では東端部に位置し、長尾山丘陵に形成された後期群集墳とは距離をおいて単独に存在する。当古墳は、径約20mの2基の円墳からなっており、南墳の主体部は粘土槧であるが、北墳は北に開口する玄室幅約2.3m、全長9mの右片袖式横穴式石室を有する。^⑨石室が開口したのは、明治24年の壁土採集時で、この時画文帶神獸鏡・六鈴鏡・金環・管玉・土玉・銀象嵌竜文刀・馬具等が出土した。北墳の時期は、発掘調査による資料でないため明確ではないが、出土須恵器が陶邑編年M T 15～T K 10型式にあたることにより、6世紀前半～中頃の年代が考えられる。^⑩なお、この石室は、白石太一郎氏の石室編年では第3期（6世紀前半）とされている。^⑪（第1図-1）

一方、雲雀丘C北4号墳は、長尾山丘陵東部の雲雀丘古墳群中に位置する。径約15mの円墳で、玄室奥壁幅2.4m、現存全長3.81mの右片袖式の横穴式石室を有している。発掘調査は行われていないが、1978年関西学院大学考古学研究会により測量調査が実施されたほか、直宮憲一氏により採集須恵器が紹介されている。^⑫古墳の時期は、6世紀前半頃とされている。（第1図-2）

さて、この両古墳の石室は、前回の検討では当丘陵における横穴式石室導入期（Ⅰ期）のものとしたが、平面企画と構築技法では、共通する点と相違する点が指摘される。まず共通点は、構造が右片袖式で、構築技法では袖部を横積みで数段積み上げる技法をとることや、前壁を構成する見上げ石に石室幅に足らない石材を用いる点があげられるが、これらはこの時期の両石室に限られる構造と構築技法で、Ⅱ期の石室には見られないものである。一方相違点は、平面企画では勝福寺北墳が玄室幅を基準長として玄室長をその2倍の長さにとる倍数型企画法であるのに対して、雲雀丘C北4号墳は玄室奥幅を基準とすると玄室長は1.6倍の長さで短い。また、構築技法でも、前者の玄室平面形が長方形であるのに対して後者が逆台形であるほか、奥壁の石積みや持



1. 勝福寺北墳 (資料12)



2. 雲雀丘C北4号墳 (資料13)

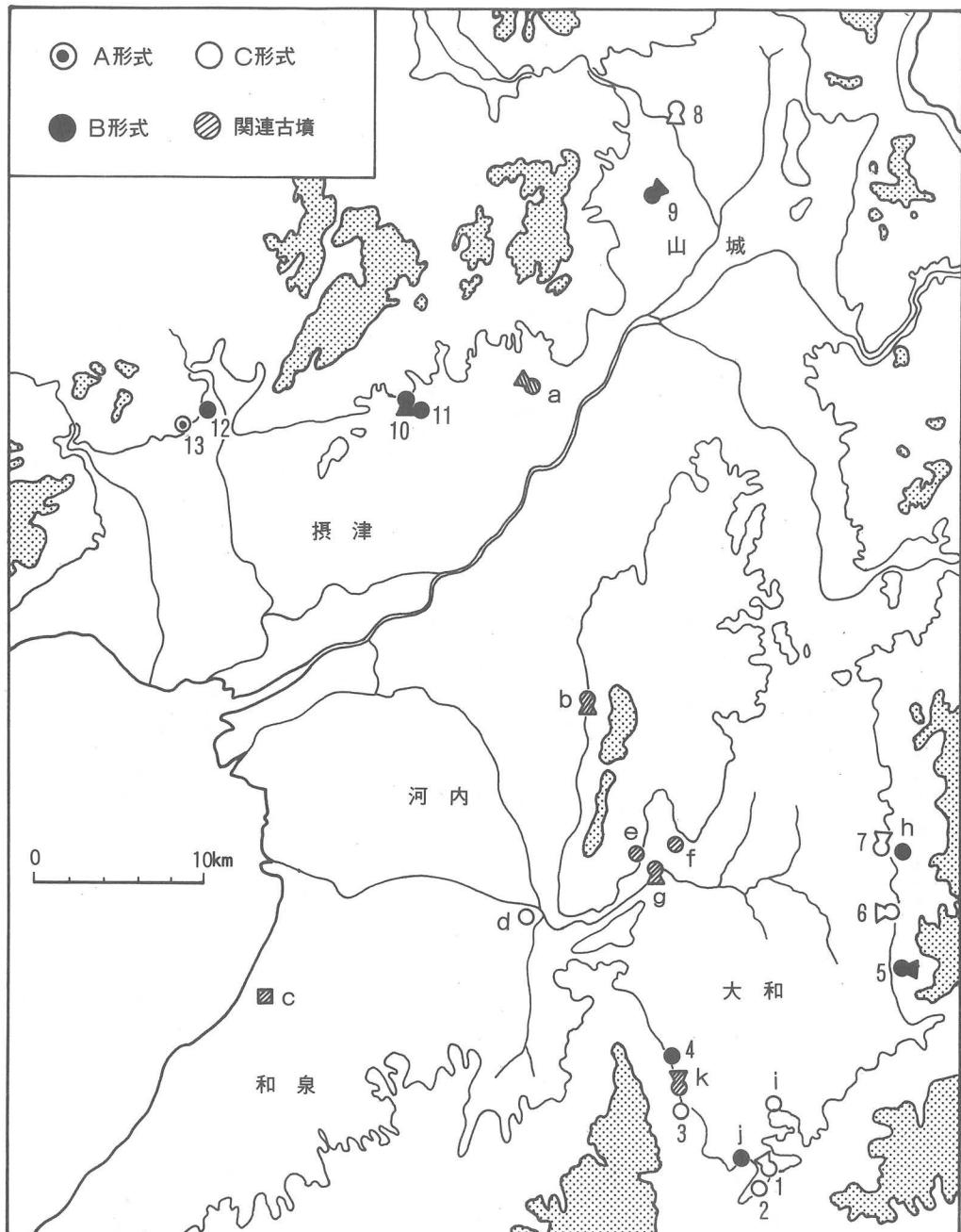
第1図 勝福寺北墳・雲雀丘C北4号墳

ち送り等の技法に相違点が認められる。

この相違点のうち、勝福寺北墳の持つ要素は次のⅡ期の両袖式の石室に継続するものであるが、雲雀丘C北4号墳の要素は当古墳に限られており、勝福寺墳はⅡ期の石室と同一系譜とした。また、勝福寺北墳の企画と構築技法は、大阪府南塚古墳・京都府物集女車塚古墳に類似しており、ともに畿内における初期横穴式石室の一タイプとしたが、雲雀丘C北4号墳の類例は見られないものと考えた。しかし、前回の両石室の検討は不十分なもので、とくに両石室の共通点については十分な評価をせずじまいであった。次章では、対象を畿内を中心とした地域に広げ、両石室の位置づけを試みてみたい。

第1表 第3形式横穴式石室一覧表

No	古 墳 名	所 在 地	墳 丘	出土須恵器	文 献
1	市尾墓山古墳	奈良県高取町	前方後円墳(66m)	MT 15・TK 10	河上邦彦「市尾墓山古墳」高取町教育委員会・檜原考古学研究所 1984
2	権現堂古墳	〃 御所市	円墳? (約20m)		佐藤小吉「権現堂古墳」『奈良県史蹟勝地調査会報告』第3回 1916)
3	笛吹神社古墳	〃 新庄町	円 墳 (約25m)		坪井良平「大和国笛吹社の古墳」『考古学雑誌』3-7 1913)
4	芝塚2号墳	〃 当麻町	〃 (約25m)	MT 15	伊藤雅文「当麻町芝塚古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1985年度 檜原考古学研究所)
5	珠城山1号墳	〃 桜井市	前方後円墳(50m)	TK 43	小島俊二・伊達宗泰「珠城山古墳」奈良県教育委員会 1956
6	東乘鞍古墳	〃 天理市	〃 (72m)		佐藤小吉「東乘鞍ノ古墳」『奈良県史蹟勝地調査会報告』第3回 1916)
7	石上塚古墳	〃 〃	〃 (115m)		泉森皎・河上邦彦「天理市石上・豊田古墳群」II 檜原考古学研究所 1976
8	天塚古墳	京都府京都市	〃 (71m)	MT 15	京都大学考古学研究会「嵯峨野の古墳時代—御堂ヶ池群集墳発掘調査報告—」1971
9	物集女車塚古墳	〃 向日市	〃 (45m)	TK 10	秋山浩三・山中章「物集女車塚古墳」向日市教育委員会 1988
10	南塚古墳	大阪府茨木市	〃 (約50m)	MT 15・TK 10	川端眞治・金澤恕「摂津豊川村南塚古墳調査概報」『史林』38-5 1955)
11	海北塚古墳	〃 〃	円 墳?	TK 43	梅原末治「摂津福井の海北塚古墳」(『近畿地方古墳墓の調査』2 日本古文化研究所 1937)
12	勝福寺北塚古墳	兵庫県川西市	円 墳 (約20m)	MT 15・TK 10	亥野彌「川西市史」第4卷 考古資料 1976
13	雲雀丘C北4号墳	〃 宝塚市	〃 (約15m)		関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群」II (『関西学院考古』5 1979)
14	瑞巖寺6号墳	三重県松阪市	円 墳	TK 10	松阪市史編纂委員会『松阪市史』第2卷 考古編 1977
15	中宮1号墳	岡山県津山市	帆立貝式 (23m)	TK 10	近藤義郎編「佐良山古墳群の研究」1952
16	緑山7号墳	〃 総社市	円 墳 (26m)		近藤義郎ほか「岡山県総社市緑山古墳群」総社市文化振興財团 1987
17	〃 8号墳	〃 〃	〃 (33m)	TK 43・TK 209	〃
18	三鳥神社古墳	愛媛県松山市	前方後円墳(45m)	MT 15	森光晴ほか「三島神社古墳」松山市教育委員会 1972



第2図 畿内における第3形式横穴式石室分布図

1~13-第1表ほか資料番号と一致

- a. 今城塚古墳
- b. 芝山古墳
- c. 塔塚古墳
- d. 藤の森古墳
- e. 柿塚古墳
- f. 椿井宮山古墳
- g. 勢野茶臼山古墳
- h. 石上・豊田古墳群(ホリノヲ4号墳・タキハラ5号墳)
- i. 新沢千塚(221号墳)
- j. 巨勢山古墳群(タケノクチ16号墳)
- k. 大和二塚古墳

3. 両石室を中心とした型式学的検討

(1) 形式の設定

畿内における横穴式石室導入期の石室は、玄室平面形と天井部の形態により次のとおり分類することができる。

- ①玄室平面が方形・長方形の片袖式で、穹窿状の天井をもつもの
- ②玄室平面が方形に近い両袖式で、穹窿状の天井をもつもの
- ③玄室平面が長方形の片袖式で、平天井をもつもの

①は、奈良県の平群谷に分布する椿井宮山古墳・柿塚古墳・勢野茶臼山古墳等があたるが、各石室の個性も強いものである。時期は、調査例が少ないため明らかではないが、5世紀末～6世紀中頃と考えられる。②は、大阪府の塔塚古墳・芝山古墳の2基があたり、時期は5世紀後半～6世紀前半と考えられる。^⑬ 両石室は、最近では九州の肥後型石室の影響が強いものとされている。③は、今回の対象とする勝福寺北墳と雲雀丘C北4号墳を含むもので、奈良県市尾墓山古墳等類例が最も多く、畿内に広く分布している。時期は、①・②に比べ新しく6世紀前半～後半と考えられる。

これらの石室は、かつて白石太一郎氏による畿内の横穴式石室編年で、②の塔塚古墳を1期に、^⑭ ②の芝山古墳と①の椿井宮山古墳を2期に、③の勝福寺北墳を3期に編年されている。しかし、①が平群谷に限定されていること、②は九州の影響が強い石室で少数であること、③は畿内で普遍的に存在しており、それぞれの形態の差が時期的変遷の結果とは考えられないこと等からすると、それぞれ別形式の石室としてとらえるのが妥当ではないかと考えられる。したがって、この①～③の石室を第1～第3形式として扱うことにしたい。

ところで、近年森下浩行氏は、畿内型の横穴式石室を平天井のA類と穹窿状天井のB類に分類し、さらにA類を右片袖式の第1群と両袖式の第2群に分け、第1・2群とも6世紀前葉に出現したものとされている。^⑮ ここであげた第3形式は、森下氏のA類第1群にあたることになるが、後にも述べるように、森下氏のいうA類第2群の両袖式石室の出現時期は6世紀中頃で第1群の石室の系譜につながりながらも別形式としてとらえたほうがよいと考えられる。以下、勝福寺北墳・雲雀丘C北4号墳の属する第3形式の石室について検討を行ってみたい。

(2) 企画面での検討

第3形式の横穴式石室をもつ古墳は、畿内では13例あげられる。その分布は、大和では市尾墓山古墳等7例が南部・東部に分布し、山城では物集女車塚古墳等2例が、摂津では勝福寺北墳・雲雀丘C北4号墳等4例が分布し、畿内全般というよりも大和と摂津・山城でも淀川右岸地域が分布の中心となる。また、畿外でも伊勢の瑞巖寺6号墳、備中の緑山7・8号墳、美作の中宮1号墳、伊予の三島神社古墳等があり、ここでは、これらを含めた18例の石室を中心に検討したい。なお、構造では石上大塚古墳、天塚古墳、海北塚古墳、緑山7号墳の4例だけが左片袖式で、他はすべて右片袖式である。(第1表・第2～5図)

まず、石室の企画ではこれまでってきたように玄室の平面形について、玄室幅を基準長とし

て玄室長を割った数値をもとに、A型（2倍に足らないもの）・B型（ほぼ2倍のもの）・C型（2倍をこえるもの）に分け、さらに玄室高・羨道幅・羨道長との比率についても見てみたい。¹⁶⁾
(第2表)

まず、A型のものは、玄室長比が1.6～1.7の短い石室で、雲雀丘C北4号墳・瑞巖寺6号墳・中宮1号墳等3基が該当する。基準長は、ばらつきがあるが、瑞巖寺6号墳の2.0mと雲雀丘C北4号墳・中宮1号墳の2.4m～2.62mにはほぼ分かれる。玄室高比は、0.8～1.0で、いずれも玄室高は低い。羨道幅比は、雲雀丘C北4号墳・中宮1号墳が0.3～0.4と狭いが、瑞巖寺6号墳は0.6とやや広い。羨道長比は中宮1号墳が1.4である以外は不明であるが、そのほかのものも2倍に達することはないと思われる。なお、A型の石室の分布は、畿外のものが中心である。

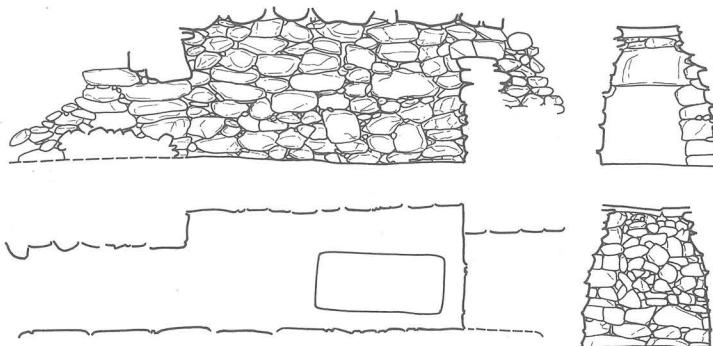
B型の石室は、玄室長比がほぼ2倍の倍数型企画法をもつもので、芝塚2号墳・珠城山1号墳・物集女車塚古墳・南塚古墳・海北塚古墳・勝福寺北墳・緑山7号墳・三島神社古墳の8基が該当する。基準長は、1.65mの珠城山1号墳、2.0～2.1mの三島神社古墳・海北塚古墳、2.3～2.6mの勝福寺北墳・南塚古墳・物集女車塚古墳・芝塚2号墳・緑山7号墳等の3グループに分かれる。とくに、2.3～2.6mのグループのうち、南塚古墳・物集女車塚古墳・芝塚2号墳・緑山7号墳の4基はきわめて近似しており、後にも述べるように尺度を使用した可能性を考えられる。玄室高比は、ほぼ1倍の三島神社古墳・南塚古墳・勝福寺北墳、1.2の珠城山1号墳・物集女車塚古墳、1.4の海北塚古墳等高低差があるが、基本的に玄室高の高いものほど年代が新しいと考えられる。羨道幅比は、0.5～0.7におさまるが、0.5～0.6のものが大半である。また、羨道幅値では勝福寺北墳・海北塚古墳・物集女車塚古墳・緑山7号墳がいずれも1.4mに近い値をとる点は、尺度によった可能性が強い。羨道長比は、三島神社古墳・南塚古墳がほぼ1.0、勝福寺北墳が1.9と倍数値に近く、それぞれB—1・B—2型の企画法が考えられる。また、物集女車塚古墳は2.3、海北塚古墳は2.8と長くなるが、基本的に羨道長の長いものほど年代が新しいと考えられる。なお、B型の石室の分布は、一部大和と畿外を含むが、摂津・山城の淀川右岸地域が中心となっており、とくにこの地域の南塚古墳・勝福寺北墳・海北塚古墳・物集女車塚古墳は、企画面での共通性を多くもっている。また、三島神社古墳・南塚古墳・勝福寺北墳は、玄室長比以外に玄室高比・羨道長比も基準長の倍数値にあたる点も注目される。

C型の石室は、市尾墓山古墳・権現堂古墳・笛吹神社古墳・東乗鞍古墳・石上大塚古墳・天塚古墳・緑山8号墳の7基が該当する。玄室長比が長い石室であるが、比率は大和の市尾墓山古墳・権現堂古墳・笛吹神社古墳・東乗鞍古墳・石上大塚古墳が2.2～2.4に集中し、山城の天塚古墳と備中の緑山8号墳が2.5～2.6と長い。基準長は1.8mと小さい天塚古墳以外は、2.4～2.6mの笛吹神社古墳・東乗鞍古墳・権現堂古墳・市尾墓山古墳と2.8mの石上大塚古墳・緑山8号墳の2グループに分かれ、尺度使用の可能性が考えられる。玄室高比は、天塚古墳・権現堂古墳・市尾墓山古墳がほぼ1.0、笛吹神社古墳が1.3以上、東乗鞍古墳・緑山8号墳が1.4で、基本的に玄室高が高いものほど年代が新しいと考えられる。羨道幅比は、緑山8号墳を除く6基が0.6～0.7で一致するが、羨道幅値は天塚古墳が1.25m、緑山8号墳が1.5mと狭いのに対して、大和の5基は幅が広く1.6～1.7mに集中しており、尺度使用の可能性が考えられる。羨道長比は、市

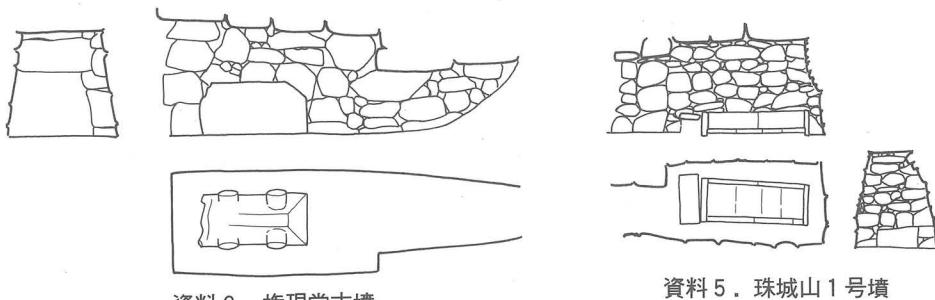
第2表 第3形式横穴式石室の規模と企画

No.	古 墳 名	袖	企			画			玄 室 規 模 (m)			羨 道 規 模 (m)			備 考
			玄室平面	玄室長比	羨道長比	玄室高比	羨道幅比	幅	長	高	幅	長	高		
13	雲雀丘C北4号墳	右	1.6	—	(0.8)	0.44	奥2.4	3.8	(1.8)	1.05	(0.48)	1.4			
14	瑞巖寺6号墳	“	A	1.7	—	1.0	0.60	2.0	3.4	2.0	1.2	—	1.1		
15	中宮1号墳	“		1.6	1.4	0.8	0.34	奥2.62	4.25	2.1	0.9	3.55	1.45		
4	芝塚2号墳	“		2.0	1.2	—	0.58	2.6	5.1	—	1.5	3.0	—		
5	珠城山1号墳	“		2.1	(0.8)	1.2	0.61	奥1.65	3.4	2.0	1.0	(1.3)	1.6	組合式家形石棺1	
9	物集女車塚古墳	“		2.0	2.3	1.2	0.54	奥2.55	5.07	3.05	1.38	5.83	1.7	櫛歛・組合式家形石棺1	
10	南塚古墳	“	B	2.0	(1.0)	1.0	0.50	2.5	5.1	2.5	1.25	(2.6)	1.6	櫛歛・組合式家形石棺1	
11	海北塚古墳	左		2.1	2.8	1.4	0.67	2.1	4.4	3.0	1.4	5.9	1.8	組合式石棺1	
12	勝福寺北塚	右		2.0	1.9	1.1	0.59	前2.32	4.7	2.5	1.36	4.3	1.56		
16	緑山7号墳	左		2.0	2.3	(1.1)	0.54	2.6	5.2	(2.8)	1.4	6.0	(1.0)		
18	三島神社古墳	右		1.9	1.0	1.0	0.55	2.0	3.7	2.0	1.1	2.0	1.35	櫛歛	
1	市尾墓山古墳	“		2.3	1.4	1.1	0.65	奥2.6	5.87	2.9	1.70	3.58	1.62	櫛歛・剝拔式家形石棺1	
2	権現堂古墳	“	C	(2.2)	(1.3)	0.9	0.68	2.5	(5.5)	2.3	1.7	(3.3)	(1.3)	剝拔式家形石棺2	
3	笛吹神社古墳	“		2.3	(2.1)	(1.3)	0.67	2.4	5.6	(3.0)	1.6	(5.0)	(1.5)	剝拔式家形石棺1	
6	東乗鞍古墳	“		2.4	2.9	1.4	0.71	2.4	5.7	3.3	1.7	7.0	1.5	剝拔式家形石棺1	
7	石上大塚古墳	左		2.3	—	(1.0)	0.61	奥2.8	6.3	(2.8)	1.7	(1.3)	—	櫛歛・石棺	
8	天塚古墳	“		2.6	1.7	1.1	0.69	1.8	4.7	2.0	1.25	3.0	1.5		
17	緑山8号墳	右		2.5	2.9	1.5	0.53	奥2.8	7.1	4.1	1.5	8.0	(1.5)		

*玄室幅(基準長)は、前・奥幅のうち大きいものをとった。また、()の数値は、欠損・未掘のため現在最大計測値と比率を示す。

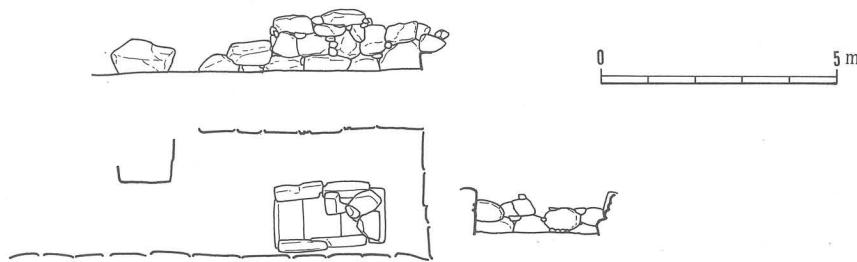


資料1. 市尾墓山古墳

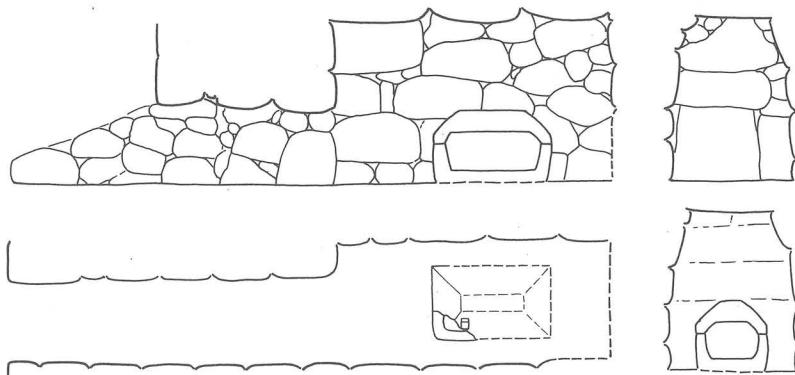


資料2. 権現堂古墳

資料5. 珠城山1号墳

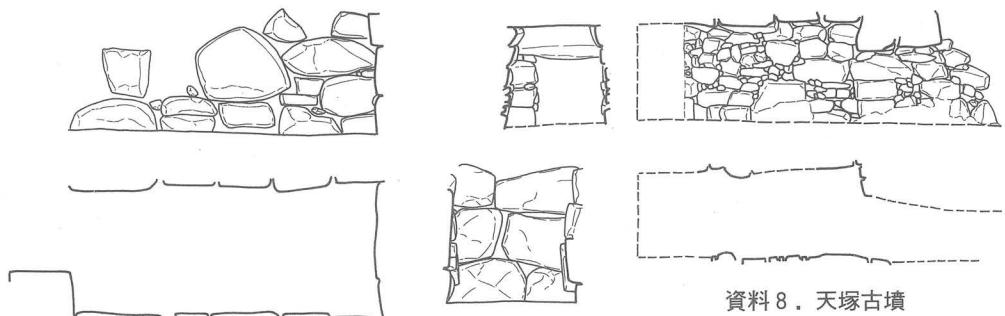


資料4. 芝塚2号墳



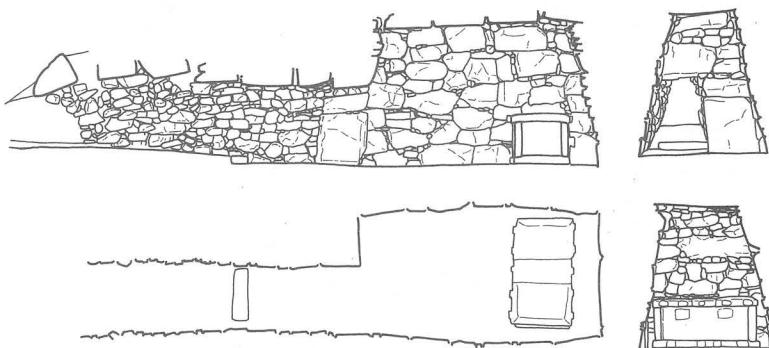
資料6. 東乘鞍古墳

第3図 第3形式横穴式石室-1

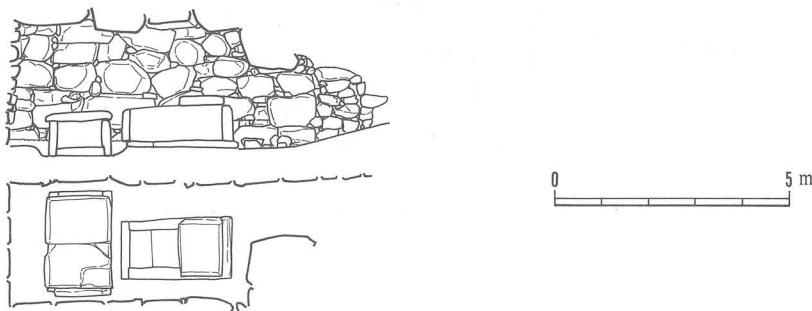


資料8. 天塚古墳

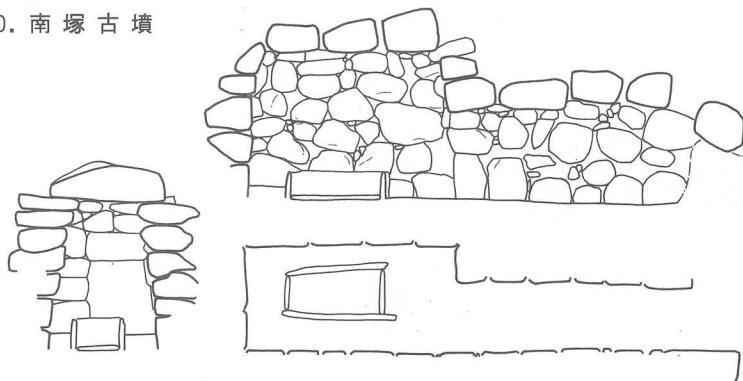
資料7. 石上大塚古墳



資料9. 物集女車塚古墳

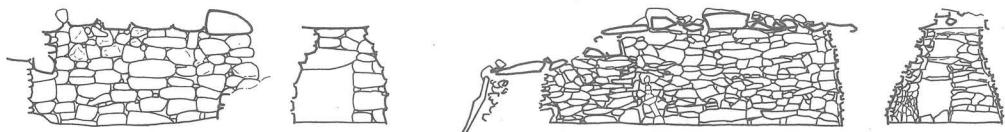


資料10. 南塚古墳



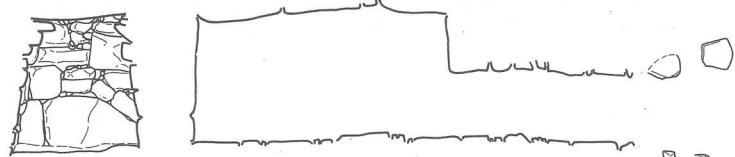
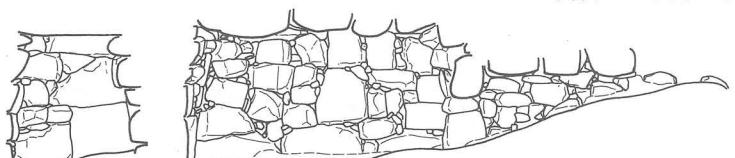
資料11. 海北塚古墳

第4図 第3形式横穴式石室-2

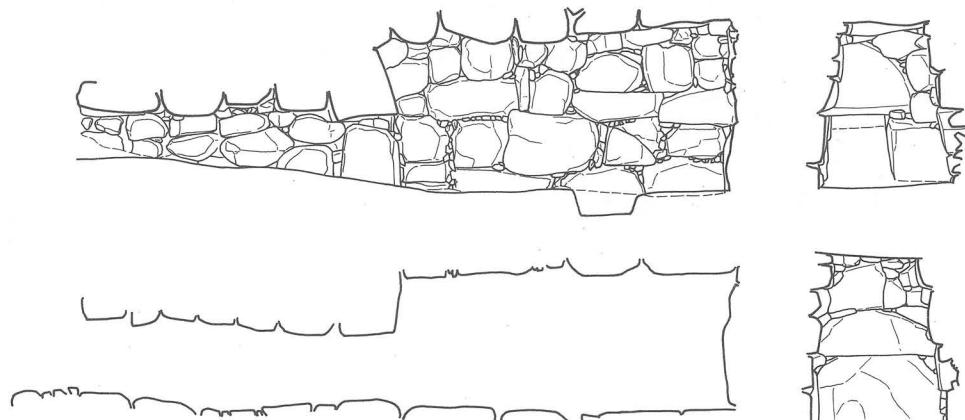


資料14. 瑞巖寺 6号墳

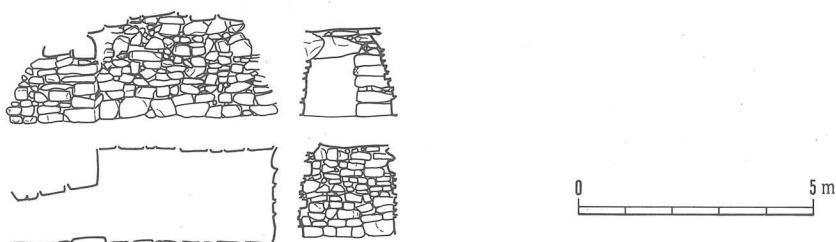
資料15. 中宮 1号墳



資料16. 緑山 7号墳



資料17. 緑山 8号墳



資料18. 三島神社古墳

第5図 第3形式横穴式石室－3

尾墓山古墳の1.4から東乗鞍古墳と緑山8号墳の2.9までばらつきがあるが、笛吹神社古墳はほぼ2倍、東乗鞍古墳と緑山8号墳はほぼ3倍で、羨道のみ倍数型企画となる可能性もある。また、玄室高と同じく、基本的に年代の新しいものほど長くなる傾向が認められる。なお、C型の石室は、山城の天塚古墳と備中の緑山8号墳以外は大和に集中するが、大和の5例は、以上のように基準長・玄室長比・羨道幅等の面で共通する企画性をもっている。

以上、A～C型石室の企画についてみてきたが、それぞれ時期的に変化する玄室高比や羨道長比をもちながらも、玄室長比・基準長・羨道幅比や分布地域において特徴をもち、第3形式のなかでもA～Cの小形式に分けて考えることが可能である。

(3) 使用尺度について

尺度使用の可能性については、いくつかの石室の各部分で近似する数値が見られることより考えることができる。

まず、基準長では、A～C形式をとおして2.3～2.6mに11基が集中し、なかでも2.4～2.6mのものがとくに多い。また、2.0～2.1mのものも3基、2.8mのものが2基ある。玄室高では、A～C形式をとおして2.0～2.1mものが5基、B・C形式で2.3～2.5mのものが3基、B・C形式で約3mのものが4基ある。羨道幅では、A・B形式で1.0～1.1mのものが3基、B形式で1.36～1.4mのものが4基、C形式で大和のものに限り1.6～1.7mのものが4基存在する。(第3表)

ここで仮に1尺を34～35cmとすると、次のような結果が得られる。

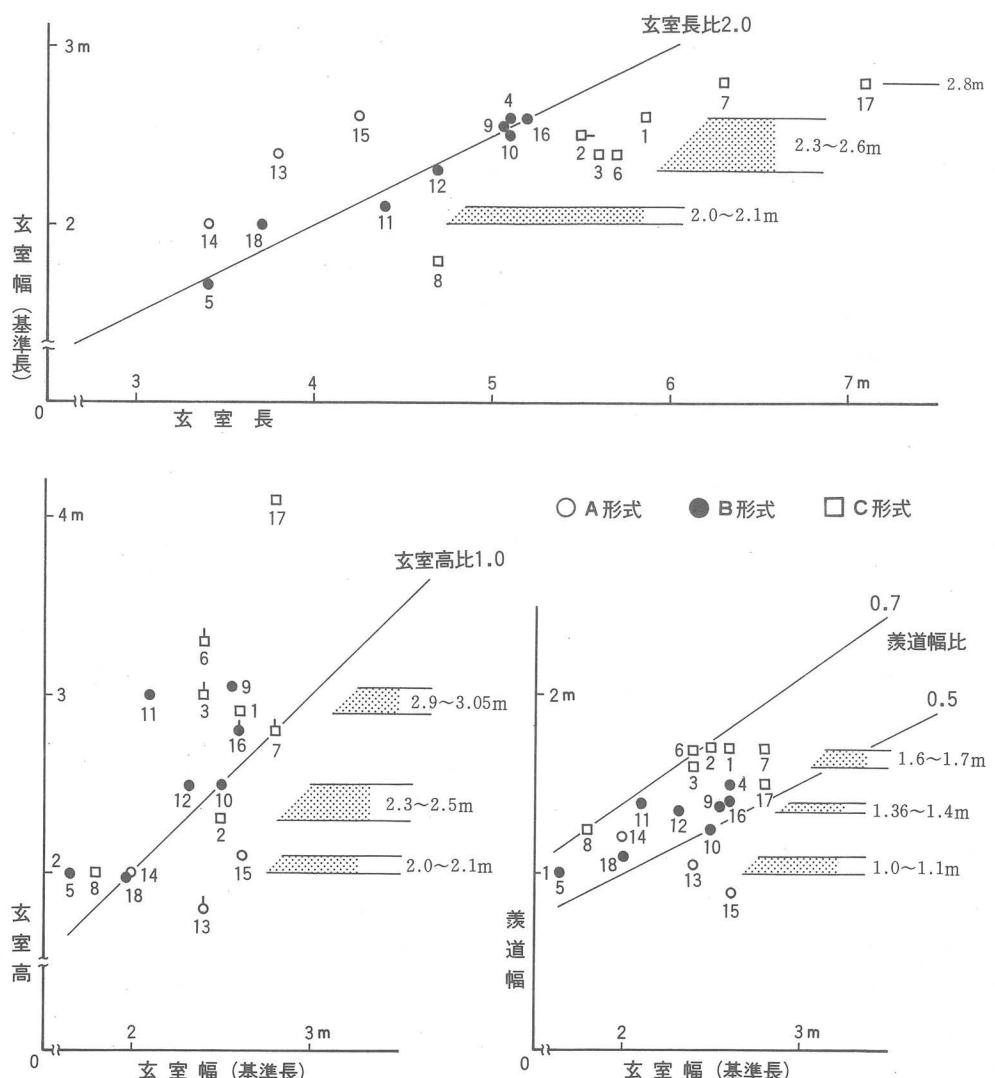
- 基準長 2.0～2.1m(3例) = 6尺 2.3～2.6m(11例) = 7尺 2.8m(2例) = 8尺
- 玄室高 2.0～2.1m(5例) = 6尺 2.3～2.5m(3例) = 7尺 2.9～3.05m(4例) = 9尺
- 羨道幅 1.0～1.1m(3例) = 3尺 1.36～1.4m(4例) = 4尺 1.6～1.7m(5例) = 5尺

この尺度により、石室規模を基準長で表すと、7・8尺を大型、6尺を中型とし、以下を小型と分類することができ、なかでも7尺のものがA～C形式をとおして大半をしめることが知られる。一方、基準長のなかでもとくに多い2.4～2.6mの値を10尺にあて、1尺を24～26cmと考えることもできるが、1尺を34～35cmと考えたほうが該当する数値が多いようである。

さて、横穴式石室使用の尺度については、これまでの研究では唐尺(約30cm)・高麗尺(約35cm)・晋尺(約24cm)^⑯等があげられてきた。しかし、尺度は常に変化するものであり、用途により幾種類もの尺度が併存したと考えられることから、尺度名が知られる尺度に限定してあてはめることは無理があるようと思われる。それよりも実際の資料より得られた数値より帰納して得られた尺度を重視すべきであろう。したがって、ここで得られた1尺=34～35cmという尺度については、高麗尺系統の尺度にあたる可能性が強いという指摘にとどめることにしたい。なお、以前長尾山丘陵の資料で得られた尺度は、1尺=33～35cmで、ここで得られた尺度に近似している。

(4) 構築技法面での検討

前回行ったのと同様に、石室の細かい形態を決定したと考えられる構築技法について検討してみよう。取り扱う技法は、石材・玄室平面形・前壁・奥壁・袖部・玄室天井石・羨道天井石等で、それぞれ次のとおり分類することができる。(第6・7図)



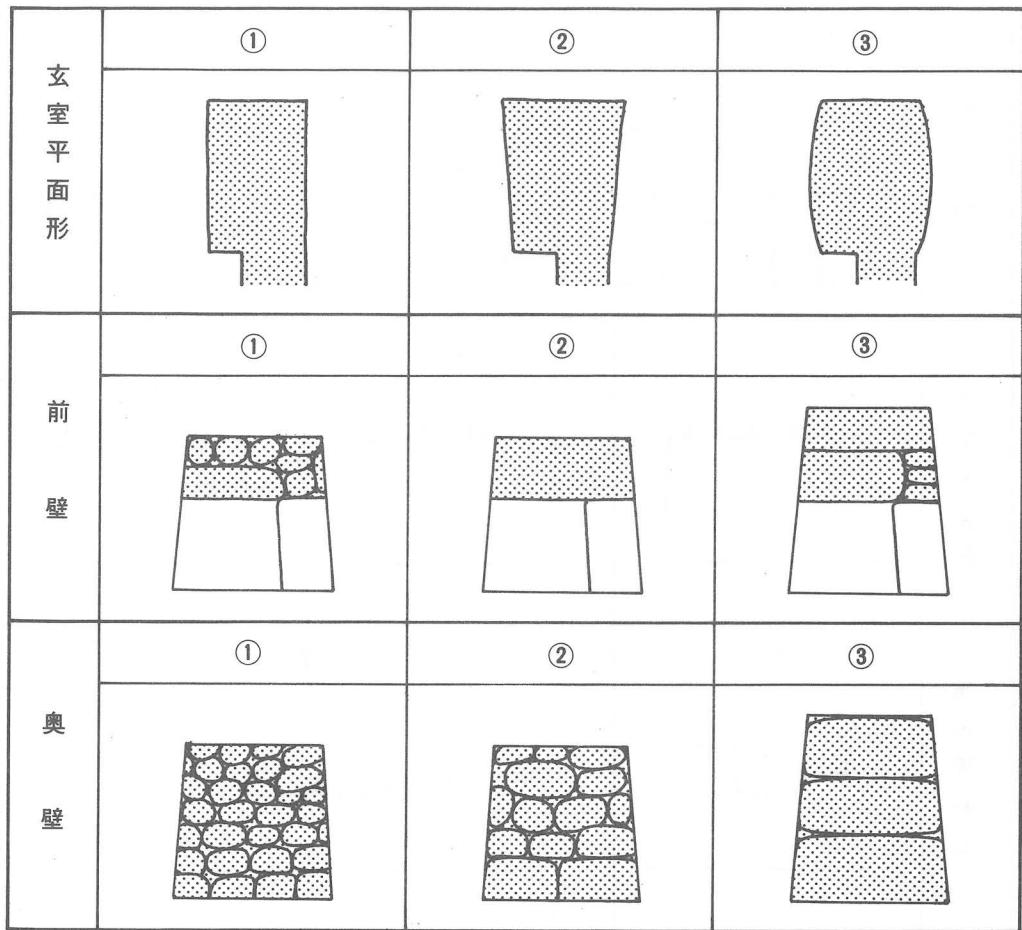
第3表 石室各部数値比較表

○石材

- ①全体に小石材で構築する。
- ②長辺約1m以上の比較的大型の石材で構築する。
- ③長辺約2m以上の大型石材を含み構築するもの。

○玄室平面形

- ①玄室前幅と奥幅が等しい長方形のもの。
- ②玄室前幅より奥幅が広い逆台形のもの。
- ③玄室中央の幅が広い胴張り状のもの。



第6図 構築技法模式図—1

○前壁

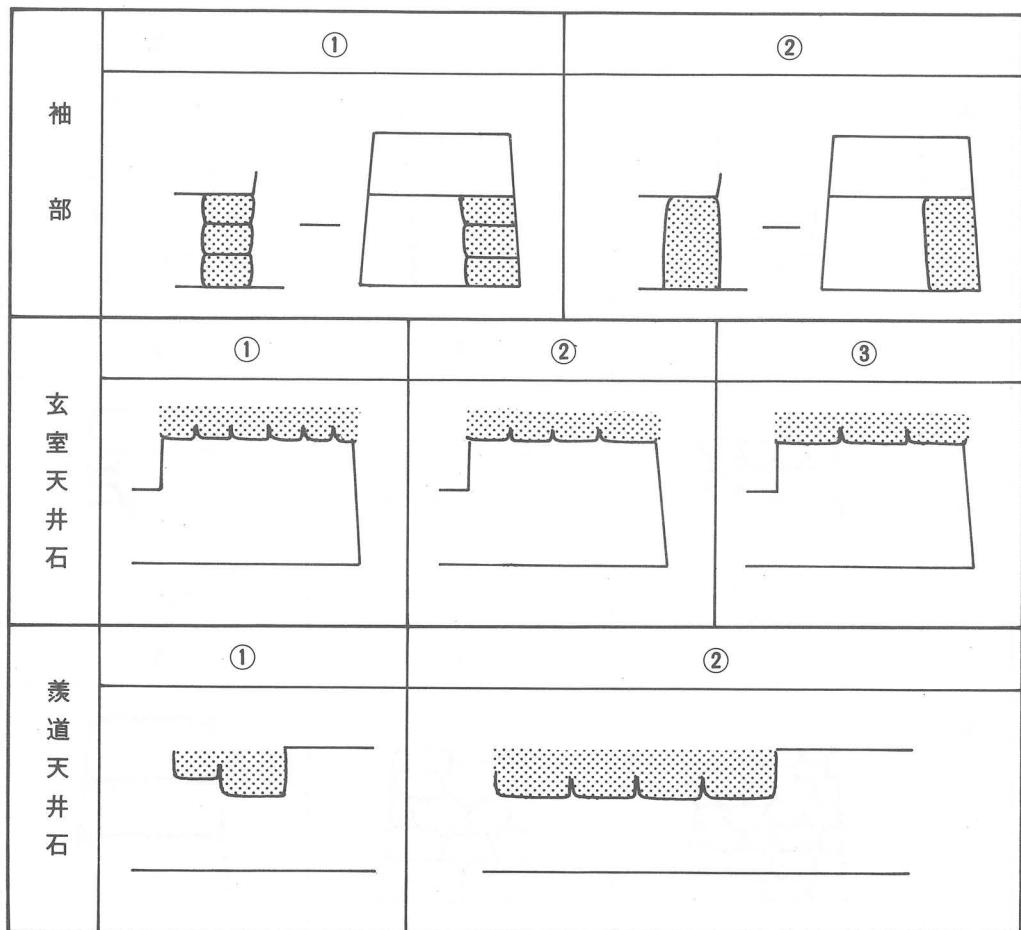
- ①見上げ石が1石であるが、玄室幅に足らず、空いた部分に小石を詰めたもの。見上げ石の長さは短く、袖部の石にかろうじて載っているものが多い。
- ②見上げ石が1石で、玄室幅いっぱいの石材を用いたもの。見上げ石は、袖部の石に十分に載っている。
- ③見上げ石を2石積み上げたもの。

○奥壁

- ①小石材のみで構築するもの。
- ②基底部に大型の石材を用いるもの。
- ③玄室幅いっぱいの巨石を積み上げたもの。

○袖部

- ①すべて横積みで、数段積み上げたもの。
- ②大型の石材の長辺を立てたもので、一石だけのものや、上に小石材を横積みで載せるものもある。



第7図 構築技法模式図一2

○玄室天井石

- ①細長い石材を5～7枚架構したもの。
- ②比較的大型の石材を4枚架構したもの。
- ③大型の石材を3枚架構したもの。

○羨道天井石

- ①短い羨道で、天井石が2枚よりなり、入口側のものが一段上がるもの。
- ②天井石が3枚以上からなり、長い羨道をもつもの。

以上の構築技法について、先にみたA～C形式との対応関係や年代関係についてについてみてみたい。(表4表)

まず、石材では、A形式はすべて①技法で、小石材のみで構築している。B形式では、①技法が3例、②技法が5例あり、C形式では、①技法が1例、②技法が3例、③技法が3例ある。技法の年代については、基本的には①技法→②技法→③技法の変遷が考えられ、小石材から大型石材への流れが認められる。なお、緑山8号墳のように奥壁に長辺約3mの巨石を使用するものも

一部あるが、すべて巨石で構成される石室は第3形式には存在しない。

玄室平面形では、長方形が大半である。逆台形はA形式の雲雀丘C北4号墳・中宮1号墳とB形式の珠城山1号墳の3例、胴張りはB形式の物集女車塚古墳と緑山7号墳の2例しか存在せず、A形式に逆台形が多いという以外にとくに形式や年代との関係は認められない。なお、奥幅の狭くなる台形の石室は当形式では存在しない。

前壁は、①技法が10例と最も多く、②技法が4例、③技法が1例である。A～C形式との関係では、A形式はすべて①技法、B形式は珠城山1号墳を除きすべて①技法である。これに対してC形式では、①技法が2例、②技法が3例、③技法が1例で、各技法が見られるものの②技法がやや多い。また、地域別にみると、A・B形式を中心の摂津・山城の淀川右岸地域と畿外ではすべて①技法で、C形式を中心の大和では②技法が多く、前壁技法とA～C形式及び分布地域との対応関係は明確である。技法の年代については、A・B形式では継続して①技法がとられるが、C形式では1例だけの東乘鞍古墳の③技法は、見上げ石を2段積み玄室高を高くするもので、①・②技法より新しく、①・②技法→③技法の変遷が考えられる。なお、①技法は、ここでとりあげる第3形式の石室固有の技法であるが、②技法は次期に現れる両袖式横穴式石室にも継続されている。また、③技法も単純に玄室幅いっぱいに2石積み上げる技法は、次期の両袖式横穴式石室にみられるが、東乘鞍古墳の場合下段は①技法であり、①技法との関係が窺われる。

奥壁は、①技法が7例、②技法が6例、③技法が1例ある。形式では、C形式のものに不明のものが多いが、とくに形式との対応関係は認められない。技法の年代については、①技法→②技法→③技法の変遷が考えられ、石材との対応関係が窺われる。なお、奥壁幅いっぱいに巨石を積み上げる③技法は、次期の両袖式横穴式石室に多くみられるが、当形式では緑山8号墳を除きまだ出現していない。

袖部では、①技法が10例、②技法が7例と①技法が多い。形式との対応関係では、A形式がすべて①技法で、B・C形式では両技法がみられる。技法の年代については、大型の石材の長辺を立てる②技法は、次期の両袖式横穴式石室に継続するもので、①技法→②技法の変遷が考えられる。

玄室天井石は、①技法が9例、②技法が4例、③技法が3例で、①技法が多い。形式との対応関係では、A形式はすべて①技法である。B・C形式は①～③技法それぞれを採用しているが、B形式では①技法は三島神社古墳の1例だけである。技法の年代については、基本的に天井石の枚数の多いものから少ないものへの移行が認められ、①技法→②技法→③技法の順が考えられる。

羨道天井石では、不明のものが多いが、天井石2枚よりなる①技法はB形式で1例、C形式で2例存在する。また、②技法はA形式で1例、B形式で4例、C形式で4例存在し、各形式とも両技法を採用している。技法の年代については、基本的に天井石の枚数の少ないものから多いものへの移行が認められ、①技法→②技法の順が考えられる。また、②技法のものでも天井に段差をもつものがあり、①技法の痕跡が認められる。なお、閉塞については、①技法では玄門部で、②技法では羨道入口部で行われている。

第4表 第3形式横穴式石室構築技法一覧表

No	古墳名	玄室平面企画	石材			玄室平面形			前壁			奥壁			袖		玄室天井石			羨道天井石	
			①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	③	①	②	①	②	③	①	②
13	雲雀丘C北4号墳	A	○			○		○			○				3		5				?
15	中宮1号墳		○			○		○			○				10		8				5
14	瑞巖寺6号墳		○		○			○					○		4		6				?
18	三島神社古墳	B	○		○			○			○				5		5			2	
4	芝塚2号墳		○		○				?		○				○			?			?
5	珠城山1号墳		○			○			○		○				3				3		?
10	南塚古墳		○	○				?		○					?			4		(1)	
12	勝福寺北墳		○	○			○					○			3			4			4
9	物集女車塚古墳		○			○	○				○				2		4				7
16	緑山7号墳		○			○	○				○				1		4				4
11	海北塚古墳		○	○		○					○				3			3			5
1	市尾墓山古墳	C	○		○			○		○					5		5			2	
8	天塚古墳		○	○				○			?				3	(4)				2	
2	權現堂古墳		○	○				○			?				3	(4)					(2)
3	笛吹神社古墳		○	○			○				?				1	5					3
17	緑山8号墳		○	○			○						○		1	5					5
7	石上大塚古墳		○	○				?			○				(1)		?				?
6	東乘鞍古墳		○	○					○		?				2			3			3

*袖及び天井石の数値は、石材数を示し、()は現存数を示す。

(5) A～C形式の型式編年

以上、第3形式の横穴式石室の企画・構築技法の検討を行ってきたが、玄室平面企画によるA～C形式の分類をもとにすると、明らかに形式に対応する要素が存在し、形式設定の妥当性が窺われる。一方、各形式をとおして時期的に変化する要素もあり、編年でのがかりとすることができる。ここでは、各石室をこれらの要素の「一括遺物」としてとらえることにより、型式設定を行い、系譜・年代関係を明らかにしたい。

まず、A形式は、企画において玄室高比がすべて1.0以下である。また、構築技法においては、石材がすべて①技法、前壁がすべて①技法、袖部がすべて①技法、玄室天井石がすべて①技法であること等共通要素が多く、袖部の②技法、玄室天井石の②・③技法等新しい技法がみられないのが特徴である。しかし、玄室平面形は、逆台形の雲雀丘C北4号墳・中宮1号墳と長方形の瑞

第5表 A形式石室の型式の組列

組 列	第1系列	雲雀丘C北4号	中宮1号	
	第2系列			瑞巖寺6号
企 画	玄室高比	(0.8)	0.8	1.0
	羨道幅比	0.4	0.3	0.6
	羨道長比	—	1.4	—
構 築 技 法	石材	←————①————→		
	前壁	←————①————→		
	奥壁	←————①————→ ←————②————→		
	袖部	←————①————→		
	玄室天井石	←————①————→		
	羨道天井石	? ---②--- ?		
出土須恵器		?	T K 10	

巖寺6号墳に分けられ、2系列に細分することができる。また、各石室の構築技法の共通要素が多いため明確ではないが、奥壁・羨道天井石の技法をもとにすると、第5表のような型式の組列が推定される。雲雀丘C北4号墳と中宮1号墳の前後関係は明らかではなかいが、羨道天井石の技法において雲雀丘C北4号墳の場合おそらく短い羨道をもつと推定されることに対して、中宮1号墳の場合②技法をとっていることより、いちおう雲雀丘C北4号墳を先行させた。また、瑞巖寺6号墳も企画・構築技法とも他の2例と大差はないが、奥壁の基底石にやや大型の石材を用いているのを②技法とし、両石室より新しいものとした。

なお、石室以外の要素では、A形式の分布は先にも述べたように畿外が中心で散在して分布している。また、墳丘も、中宮1号墳のみ造り出しをもつが、すべて円墳で、前方後円墳が含まれていないこと等、B・C形式に対して異なった要素を多くもっている。また、石室内部には、B・C形式と異なり刳抜式家形石棺・組合式石棺はみられない。

B形式の石室は、大半は第6表にみられるように企画・構築技法が時期的に変化しており、三島神社古墳から海北塚古墳に至る型式の組列を考えることができる。企画では、玄室高比は、ほぼ1.0のものから1.2・1.4の高いものへ、羨道長比は、ほぼ1.0から2.8の長いものへ変化している。また、構築技法でも、石材・奥壁・袖部・玄室天井石・羨道天井石等は、①技法から②技法へ、あるいはさらに③技法に変化しており、これらをもとに型式の変化はつかみやすい。一方、羨道幅比では最も新しい海北塚古墳を除くと0.5~0.6で一定していることや、前壁技法では一貫して①技法がとられていることは、B形式の特徴となっている。なお、この前壁①技法からすれば、B形式はA形式と系譜的に近いものと考えられる。

ところが、ここで問題となるのは珠城山1号墳の取扱いである。珠城山1号墳は、構築技法で

第6表 B形式石室の型式の組列

組 列	第1系列	三島神社2号	南塚	勝福寺北	物集女車塚 緑山7号	海北塚
	第2系列				珠城山1号	
企 画	玄室高比	1.0~1.1			1.2	1.4
	羨道幅比	0.5~0.6				0.7
	羨道長比	1.0~1.2		1.9	2.3	2.8
構 築 技 法	石材	①	②			
	前壁 第1	①				
	第2				②	
	奥壁 第1	①	②			
	第2				①	
	袖部 第1	①	②			
	第2				①	
	玄室天井石	①	②	③		
	羨道天井石	①	②			
	出土須恵器	MT 15		TK 10		TK 43

も石材・袖部・奥壁からすると、三島神社古墳と共に通する要素をもち、古く位置づけることができる。しかし、玄室高比が1.2であることや玄室天井石が3枚であること等新しい要素をもち、ここでは新しい要素を重視し、物集女車塚古墳・海北塚古墳と対応するものと考えたが、他の石室とは異なる技法の変遷スケールをもつ別系譜の石室と考えた方がよいと考えられる。なお、芝塚2号墳と南塚古墳は前壁等の技法は不明であるが、判明する他の企画・技法より主流となる第1系列に含め、とくに芝塚2号墳については最古の三島神社古墳と同型式とした。

ところで、今回は取り上げなかったが大和には群集墳内にB形式の横穴式石室が存在する。それは、石上・豊田古墳群のホリノヲ4号墳¹⁸⁾・キタハラ5号墳¹⁹⁾と巨勢山古墳群のタケノクチ16号墳²⁰⁾等である。これらの石室は、キタハラ5号墳は不明であるが前壁①技法をとることや、その他の構築技法もほぼ三島神社古墳に類似することより、第1系列でも初期の型式に該当することが知られ、出土須恵器の型式からも矛盾しない。また、規模の面では、ホリノヲ4号墳とキタハラ5号墳は基準長が1.6m・1.3mと小型であるが、タケノクチ16号墳は基準長が2.0mである以外に羨道幅・羨道高が三島神社古墳に近似しており、両石室の密接な関係が窺われる。B形式の分布は摂津・山城の淀川右岸地域に多いが、大和でも先にあげた第1系列の最古の型式と考えられる芝塚2号墳に加えて、このように群集墳内にも同形式・系列の小型の石室が存在することは、B形式の起源を考えるうえで重要である。

なお、B形式の墳丘は、前方後円墳と円墳があるが、前方後円墳の規模は全長40~50m級のも

第7表 C形式石室の型式の組列

組 列	第 1 系 列	市 尾 墓 山	権 現 堂 天 塚	(石上大塚)	
	第 2 系 列			笛 吹 神 社	東 乘 鞍 緑 山 8 号
企 画	玄 室 高 比	←———— 0.9~1.1 —————→		←———— 1.3~1.4 —————→	
	羨 道 幅 比	←———— 0.6~0.7 —————→			←———— 0.5 —————→
	羨 道 長 比	←———— 1.4~1.7 —————→		2.1	2.9
構 築	石 材	①	②	③	
技 法	前 壁	②		③	
	第 1			①	
	奥 壁	①	②	③	
	袖 部	①	②	③	
	玄室天井石	①		③	
	第 2			①	
	羨 道 天 井 石	①	②	③	
	出 土 須 恵 器	MT 15		?	TK 43

のに限られ、C形式のものに比べると小さい。また、石室内部には、組合式石棺を納める例は多いが、刳抜式家形石棺は見られないがこの形式の特徴である。

C形式の石室は、前壁技法をもとにし、②技法をとる市尾墓山古墳・天塚古墳・権現堂古墳等を第1系列とした。また、A・B形式の主流を占める①技法をとる笛吹神社古墳・緑山8号墳と①技法との関係が考えられる③技法をとる東乗鞍古墳を第2系列としたが、笛吹神社古墳・緑山8号墳の両石室の前壁の石積みはきわめて類似しており、密接な関係が窺われる。両系列を通じて企画・構築技法はB形式と同じく変化しており、第7表のような型式の組列が考えられるが、第1系列より第2系列への変化を読み取ることができる。石上大塚古墳については、企画・構築技法とも不明な点が多く、型式や系列は明らかでないが、袖部が②技法をとることより、笛吹神社古墳以降のものと考えた。ただし、羨道幅比では系列を問わず緑山8号墳を除く他のすべてが継続して0.6~0.7と幅広いことや、大和の5例が系列とは関係なく企画面での共通点をもつこと、前壁技法が②技法より①・③技法に変化すること、第2系列では新しい段階にもかかわらず玄室天井石の枚数の多い①技法をとる点等は当形式の特徴である。なお、第2系列の笛吹神社古墳・緑山8号墳については、前壁①技法をとることや、緑山8号墳に隣接してB形式の緑山7号墳が存在することからすれば、系譜的にB形式に近い可能性がある。また東乗鞍古墳の前壁③技法も①技法に近く、第2系列とB形式の関係が窺われる。

なお、今回は取り上げなかったが、従来より畿内の初期横穴式石室としてよく取り上げられる

第8表 A～C形式石室の組列

時 期 形 式		I	II	III	IV
A	第1	雲雀丘 C 北 4 号	中宮 1 号		
	第2		瑞巖寺 6 号		
B	第1	三芝 島塚 神社 号 2	南勝福寺 北	物集山 女事塚 7 号	海北塚
	第2				珠城山 1 号
C	第1	市尾墓山	權現堂 天塚	(石上大塚)	
	第2			笛吹神社	東緑乗鞍山 8 号
企画	玄室高比	0.8～1.2		1.2～1.4	
	羨道長比	1.0～1.7		1.9～2.3	2.8～2.9
構築技術	石材	①	②	③	
	袖部	①	②		
法	羨道天井	①	②		
	奥壁	①	②	③	
出土須恵器		MT 15		TK 43	
TK 10					

河内の藤の森古墳^②や、最近調査された大和の新沢千塚221号墳は、小規模ながらも玄室長比は2.3でC形式に該当する。その他の企画・構築技法は明らかでないが、5世紀後半頃の構築と考えられており、C形式の初源にあたる可能性も考えられる。

なお、C形式の墳丘は前方後円墳と円墳があるが、前方後円墳はとくに第1系列に限定され、その規模は全長70m級の大型のものに限られる。また、大和の石上大塚古墳を除く4例には古式の削抜式家形石棺が納められるが、C形式が他の形式に比べて玄室長比が大きく、羨道幅が1.6～1.7mと幅広いこととの関連性が窺われる。

以上のA～C形式の型式の組列と細分について、各形式の企画・構築技法をもとにすると、第8表のようにまとめることができる。縦は各形式及び形式内での細分を示し、横は企画・構築技法よりみたⅠ期～Ⅳ期の時期を示すもので、各型式間で共通する企画・構築技法を基準にするとこのような結果が得られた。

時期の設定基準については、Ⅰ期は企画において玄室高比が1.0～1.1で基準長に近く、羨道長比が1.0～1.7、構築技法において小石材を用いる①技法、奥壁が小石材のみで構成される①技法、袖部がすべて横積みの①技法、玄室天井石が5～7枚の①技法、羨道天井石が2枚のみの①技法のすべてに該当するものをあてた。Ⅱ期は、Ⅰ期の要素を継承しながらも、企画では羨道長比が

ほぼ2倍のもの、構築技法では石材に比較的大型の石材を用いる②技法、奥壁の基底部に大型の石材を用いる②技法、玄室天井石を4枚とする②技法、羨道天井石を3枚以上とする②技法等この時期に出現するいずれかの要素に該当するものをあてた。Ⅲ期は、企画では玄室高比が1.2をこえ高くなるもの、羨道長比が2倍をこえるもの、構築技法では袖部が大型の長辺を立てる②技法等新たに出現する要素をもつものをあてた。Ⅳ期は、企画では玄室高比が1.4とさらに高いもの、羨道長比が3倍に近く長いもの、構築技法では奥壁に玄室幅いっぱいの巨石を積み上げるもの、玄室天井石を3枚とするもの等新たに出現する要素をもつものをあてた。

企画・構築技法のすべての要素の変化は、各形式間で必ずしも一致しないが、企画では玄室高比と羨道長比は時期とともに大きくなる傾向にあり、構築技法では石材が①技法（I・II期）→②技法（II～IV期）→③技法（IV期）、袖部が①技法（I・II期）→②技法（III・IV期）、奥壁が①技法（I・II期）→②技法（II期～IV期）→③技法（IV期）と明確に分かれ、とくに明確な袖部の変化をもとにすると、古段階（I・II期）と新段階（III・IV期）に大別することができる。一方、羨道幅比・前壁技法・玄室天井石技法は各形式間の変遷スケールが異なり、取り上げることはできなかった。

この表からすると、A形式はI・II期の古段階だけで、III・IV期の新段階には存在しない。また、B形式では中心となる第1系列はI期からIV期まで継続するが、I期は群集墳例も含めると大和が中心となり、分布の中心となる摂津・山城の淀川右岸地域での構築はII期以降であることがわかる。B形式中唯一前壁②技法をとる第2系列の珠城山1号墳については、類例がないため明らかではないが、III・IV期の新段階にあたることより、C形式の技法の影響を受けながらB形式第1系列より派生した形式とも考えられる。C形式については、第1系列はI・II期、第2系列はIII・IV期と古段階・新段階に明確に分かれ。第2系列は、先に指摘したように前壁①・③技法をとるとや、笛吹神社古墳と緑山8号墳の玄室天井石が依然①技法である等C形式第1系列とは異質なもので、III期にC形式第1系列よりB形式の技法の影響を受けながら派生した形式の可能性が強い。

なお、実年代については、出土須恵器よりI期（6世紀前半）・II期（6世紀前半～中頃）・III期（6世紀中頃）・IV期（6世紀中頃～後半）と考えられる。ただし、この表は従来の須恵器編年や家形石棺に基づく石室の年代観とは若干異なるもので、実際の年代とも異なるかもしれない。また、ここにみられるように、企画・構築技法の諸要素の変化や組合せは単純ではなく、各企画・構築技法や各形式により異なったスケールで変遷していた可能性も強い。とくにA形式は出土須恵器に比べて古い段階の構築技法が集中しており、B・C形式と一つの表にまとめることはむりがあるかもしれない。

（6）第4形式の設定

さて、これまでしばしばふれてきたが、畿内において定型化する大型の横穴式石室と今回とりあげた第3形式の横穴式石室との関係について若干検討してみたい。畿内では6世紀後半から7世紀にかけて大和を中心として大型の両袖式横穴式石室が多数構築される。これらの横穴式石室に関して、まず企画についてみると、構造では平天井で長方形玄室平面をもつ点が第3形式と同

様であるが、両袖式である点が大きく異なっており、第3形式とは別の形式設定が妥当と考えられる。これを仮に第4形式としてみよう。

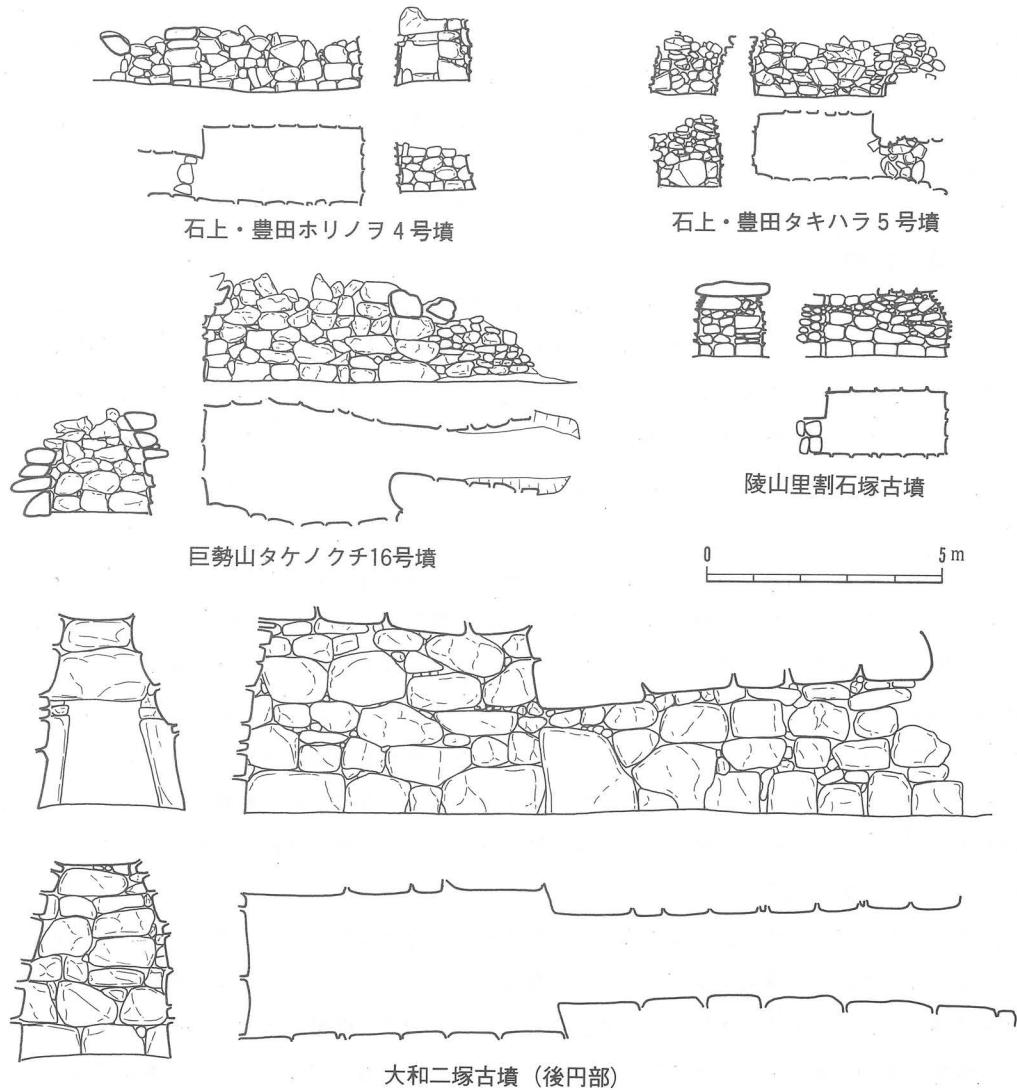
この第4形式の石室は、平面企画では前回にも指摘したように玄室長比がほぼ2倍のB型のものが大半を占めるが、2倍以上のC型も存在する。また、羨道長比では、ほぼ3倍のもののほか4倍のものもある。一方、構築技法についてみると、石材では、②・③技法の大型石材を用いるもの以外に巨石を用いるものがある。前壁では、第3形式のA・B形式に多くみられた①技法は消滅し、C形式みられた②技法が継続して用いられ、さらに玄室幅いっぱいにもう一段積み上げる技法が現れる。奥壁では、②技法以外に③技法を継承し巨石を奥壁幅いっぱいに2・3段積み上げる技法が用いられる。袖部では、すべて横積みで数段積み上げる①技法は消滅し、巨石の長辺を立てる②技法が継続する。玄室天井石では、4枚の②技法、3枚の③技法のほか、2枚のものがある。このようにみてみると、企画・構築技法では、第3形式のⅠ・Ⅱ期の要素はほとんどないが、Ⅲ・Ⅳ期に並行ないしは新たに現れる要素が認められる。したがって、第4形式の石室は、第3形式とは別形式で明らかに後に現れる形式でありながらも、第3形式の系譜を引く形式としてとらえることが可能である。また、その分布状況からすると、この第3・4形式を「畿内型横穴式石室」という大形式にあてるのが妥当と考えられる。

さて、この第4形式の横穴式石室のうち早く現れると考えられるのは、大和二塚古墳後円部石室である。^㉒この石室は、企画では基準長が2.98m、玄室長比が2.3、玄室高比が1.4、羨道幅比が0.7、羨道長比が3.3である。また、構築技法では、大型の石材を用いる③技法、玄室平面形は長方形、前壁は見上げ石を2石積み上げる新たな技法、奥壁は基底部に大型の石材を用いる②技法、袖部は大型石材の長辺を立てる②技法、玄室天井石は4枚の②技法、羨道天井石は5枚の②技法等がみられる。これらの企画・構築技法からすれば、当石室は、第3形式のⅢ・Ⅳ期の要素をもっており、なかでも大和を中心としたC形式Ⅳ期の東乘鞍古墳に近いことが指摘される。^㉓したがって、第4形式でも当古墳の石室は、第3形式のC形式よりⅣ期頃派生した形式としてとらえることができる。

なお、これまで両袖式横穴式石室で早い時期に位置づけられるものとして考えられているものに大和の市尾宮塚古墳と河内の愛宕塚古墳がある。市尾宮塚古墳については、袖部が大型の石材を立てる②技法で、第3形式のⅢ期以降の技法をもち、奥壁は基底部が2石であるがその上に奥壁幅いっぱいの大型石材を2段積み上げており、③技法に近いものである。この奥壁の③技法は、第3形式でもⅣ期の緑山8号墳だけにみられるもので、第4形式でも上記の大和二塚古墳ではまだみられない。また、愛宕塚古墳は、出土須恵器が陶邑編年M T 15型式にあたることより、6世紀前半のものとされているが、全体に巨石で構築されていることや、奥壁幅いっぱいの巨石を2段積み上げていること等構築技法からすれば、さらに新しい時期のものと考えられる。

(7) 第3形式の起源

このように、第3形式の横穴式石室からはそのⅣ期頃より第4形式が派生し、以後大型の横穴式石室としては第4形式が主流となるが、一方では第3形式の横穴式石室の起源が問題となる。すでに指摘したように、畿内の初期横穴式石室は1～3形式に分類されるが、それらは形式とし



第8図 第3形式及び第4形式横穴式石室

て全く異なっており、それぞれの起源は別のものを考えたほうがよさそうである。

第3形式の起源については、A形式の雲雀丘C北4号墳、B形式の三島神社古墳・芝塚2号墳や大和のタケノクチ16号墳等の群集墳内の石室、C形式の市尾墓山古墳やそれに先行する可能性のある藤の森古墳・新沢221号墳等各形式の最古型式の石室の系譜が問題となるが、時期的に先行する九州に例がないことからすれば、百濟に求めることができる。百濟でも時期的に該当するのは、熊津時代（475～538年）・泗沘時代（538～660年）の横穴式石室である。このなかで類似するのは泗沘時代（538～660年）の陵山里割石塚^⑦である。この石室は、玄室幅が1.29mと小さいが、玄室長はほぼ2倍のB型平面企画をもち、玄室高比は1.0、構築技法では小石材を用いる①技法、前壁は玄室幅に足らない見上げ石を用いる①技法、袖部はすべて横積みの①技法、玄室天井石は5枚以上の①技法等を用い、しかも玄門部において割り石で閉塞する等B形式Ⅰ期の三島

神社古墳にきわめて類似している。百濟におけるこの種の石室の正確な時期や類似が不明であるため、なんとも言えないが、第3形式のB形式の石室の起源が百濟にあることはまちがいないようである。ただし、B形式が入ってきてA・C形式が派生したものか、それぞれの形式の起源が百濟に求められるのかは今後の課題としたい。

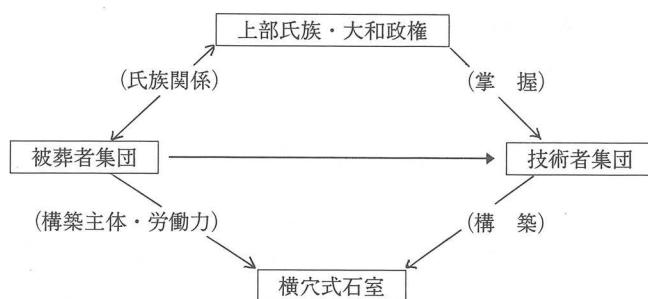
4. まとめ

以上のように、勝福寺北墳と雲雀丘C北4号墳の横穴式石室は、畿内における初期横穴式石室のうち第3形式に属し、第3形式はさらに企画と構築技法よりA～C形式に分類され、雲雀丘C北4号墳はA形式に、勝福寺北墳はB形式にあたることが明らかになった。各形式は、すでに述べたように分布地域や墳丘等にも特徴がみられ、このことからも両石室の性格を窺うことも可能である。しかし、ここではまず今回設定した形式の意義を問い合わせ、それから両石室について考えてみたい。

さて、横穴式石室構築のきっかけとしては、直接的には被葬者集団の意志があつて初めて考えられるものである。ただし、横穴式石室の分布が広範囲の地域に広がっているように、その背景には古墳文化の広まりがあるのであり、さらには社会的・政治的要因も考えられよう。しかし、横穴式石室という資料をとおしてそれらを考えようとする場合、直接その構築にあつた技術者をまず問題とせねばならないであろう。この石室構築を被葬者集団自らが行ったものとすれば、まったく別の論理が展開してこようが、技術者を想定するかぎり、石室形態を直接決定したのは被葬者集団ではなく、石室の基本的な企画や構築技法をもつ専門技術者が行ったと考えてまちがいないものと思われる。

このような考え方で横穴式石室の構築と被葬者集団・専門技術者との関係を表したのが表9表である。横穴式石室の構築にあたり、被葬者集団は技術者を必要とするが、技術者は自らもつ企画・構築技法により石室を構築したと考えられる。おそらく、構築の指導を技術者が行い、労働力は被葬者集団が賄ったのである。この被葬者集団と技術者の関係は、自由に選択できたものではなく、技術者の背後には企画・構築技法を同じくする技術者集団が存在したであろうし、技術者集団も自立したものではなく、大和政権あるいは上部氏族の掌握下にあったものと思われる。

第9表 横穴式石室構築の諸要素



また、被葬者集団も技術者を選択するにあたっては、自らの氏族関係によったものと考えられる。したがって、被葬者集団がどのような形態の石室を構築するかは、大和政権や上部氏族との関係によったと言っても過言ではないであろう。

このように被葬者集団は、その氏族関係により大和政権や上部氏族より技術者を与えられ横穴式石室を構築したが、技術者も氏族関係により広い地域で構築を行っていたと考えられる。このことから、横穴式石室の系譜を明らかにすることは、被葬者集団の氏族関係の位置づけにも関係してくるのである。今回、畿内における初期横穴式石室で第3形式を設定し、さらにA～Cの小形式に分類したが、この形式はまさにこの技術者の系譜に対応するもので、各形式の石室の分布は大和政権や氏族関係に対応するものとしてとらえられるのである。

ここで、A～C形式の技術者及び被葬者像について考えてみよう。まず、大和に分布するC形式の石室は、第3形式中石室規模が大きいことや、ほとんどが大型前方後円墳で剝抜式家形石棺をもつこと等より、6世紀前半から後半にかけて大和の中央有力氏族のもとで活動した技術者集団の存在が考えられる。また、山城の天塚古墳や備中の緑山8号墳もこの関係により構築されたものであろう。ただし、6世紀中頃を境に第1系列から第2系列に明確に入れ替わっており、この時点での技術者の大きな変化を読み取ることができる。

B形式の中心となる第1系列の石室は、6世紀前半から中頃のⅡ期以降摂津・山城でも淀川右岸地域に多く分布するが、大和のC形式の石室とは別系譜の技術者が畿内でもこの地域を中心構築を行っていたことがわかる。被葬者については、この地域の有力氏族が考えられるが、各氏族間のつながりを窺うこともできる。ただし、大和でもⅠ期に芝塚2号墳や群集墳内にも第1系列の石室が存在することより、まず大和に出現し当地域に移った技術者の系譜や氏族関係を考えることができる。また、石室以外の要素では、前方後円墳でも全長規模が40～50m級に限られることや剝抜式家形石棺がまったくないことより、大和のC形式の石室よりは一ランク落ちる取扱いが認められる。

A形式は、畿内でも西端部の雲雀丘C北4号墳のほか畿外に離れて分布することから、B・C形式に対して地方で活動した技術者が考えられる。企画・構築技法からは、B・C形式とは別系譜ととらえるが、前壁の構築技法からするとB形式に近い。また、B・C形式に比べると、群集墳中だけに存在することや、前方後円墳がないことから、B・C形式よりは低いランクの被葬者像が考えられる。

このように、A～C形式に対応して三つの系譜の技術者とその背景となる大和政権及び上部氏族の存在が考えられるが、さらに当時の政治情勢との関係を問題にする場合、時期的にみて継体～欽明朝における位置づけが問題となる。『日本書紀』の記載によれば、継体は応神の五世の孫と称して越前より迎えられて即位したものの、20年かかって大和に入つており、その背景には継体を支持する近江・尾張等の地方勢力と大和の勢力との対立があったとする説がある。また、『日本書紀』の継体没年から安閑・宣化・欽明即位までの紀年が他の史料との間に矛盾があることより、継体没後蘇我・秦氏に支持された欽明朝と大伴・物部氏に支持された安閑・宣化朝の両朝が並立し、宣化没後欽明朝に合一されたとする説もある。^㉙ 今回問題とする第3形式の石室の年

代は、まさにこれらの動乱期にあたっており、形式の分類や型式編年が大和政権や氏族関係を反映するものであるならば、その関係を検討する必要があろう。

まず、大和を中心としたC形式の石室は、継体～欽明朝の大連クラスかこれに次ぐ氏族が考えられる。市尾墓山古墳については、すでに継体朝の大連巨勢男人にあてる説があるが、各古墳の所在地より市尾墓山古墳・権現堂古墳は巨勢氏、石上大塚古墳・東乘鞍古墳は物部氏が該当するであろう。ただし、第8表でみる限り、巨勢氏関係のものは古段階（I・II期）に、物部氏関係のものは新段階（III・IV期）に分かれることは注目される。また、山城の天塚古墳については、欽明前紀に「秦大津父」の記載があり、中央勢力との関係が深かった秦氏のものと考えられる。一方、第2系列のうち笛吹神社古墳と緑山8号墳は前壁等構築技法はきわめて類似しているが、前者の被葬者と考えられる葛城氏が後者の存在する吉備での屯倉經營に蘇我氏のもとで活躍していることは興味深い。^⑪

B形式では、I期に大和の芝塚2号墳と群集墳内の小規模石室が現れるが、中・小氏族にまず採用されたと考えられる。また、II期以降摂津・山城の淀川右岸地域に多く分布する第1系列については、この地域でまとまりをもつ諸氏族の存在を指摘したが、地域的に見ると、継体が大和の磐余玉穂宮に入る以前の宮の所在地と一部一致すること、継体陵に比定される今城塚古墳が存在すること、安閑紀元年に三嶋県主飯粒が三嶋竹村屯倉を献上した記載がみられること等より大和政権の一勢力と結びついた諸氏族の存在が考えられる。また、『日本書紀』によると宣化の上殖葉皇子と火焔皇子は後の摂津国川辺郡に居住した偉那公・椎田君の祖とされることからすると^⑫、これらの氏族は継体から安閑・宣化を支持していた勢力である可能性が強い。さらに、火焔皇子が大河内稚子媛の子であることや、先にあげた三嶋竹村屯倉献上の記事からすれば、大河内氏や三嶋県主を含んでいたと考えられる。

A形式については、雲雀丘C北4号墳は不明であるが、美作の中宮1号墳は欽明紀16年記載の「白猪屯倉」に、瑞巖寺6号墳は宣化紀元年記載の「新家屯倉」の比定地にそれぞれ近接することから、大和政権による屯倉設置と関係するものと考えられる。なお、白猪屯倉には蘇我氏、新家屯倉には物部氏が関係しており、それぞれ中央氏族との結びつきが窺われる。

このように、A～C形式は大和政権や中央氏族との関係が考えられるが、『日本書紀』記載の年代や皇位継承については諸説あり、各古墳の年代をそのままあてはめることは慎重にならねばならないであろう。また、継体～欽明朝の動乱期の諸勢力の動向についてはまだ不明な点が多く、今後このような横穴式石室の形式による検討が課題として残ろう。ただし、ここで得られた石室編年をもとにすると、I期は継体期、II期は安閑・宣化期、III・IV期は欽明期にあたる可能性だけは指摘しておきたい。なお、この時期は朝鮮半島南部への出兵や百済との交渉の記事が多く見られ、先に指摘したようにこの第3形式の横穴式石室が導入される条件は十分あったものと思われる。

さて、最後に今回の当面の目的とする勝福寺北墳・雲雀丘C北4号墳の位置づけについて考えてみよう。これまでみてきたように両古墳は畿内の初期横穴式石室でも第3形式の属するが、勝福寺北墳はB形式、雲雀丘C北4号墳はA形式と小形式では異なり、それぞれ異なる系譜の技

術者により構築されたものである。勝福寺北墳の属するB形式第1系列は、6世紀前半～中頃以降摂津・山城の淀川右岸地域を中心に分布し、大和を中心とするC形式と異なった企画・構築技法をもつ技術者集団の存在とそれを掌握した上部氏族の存在、各古墳の被葬者間のつながり等が考えられる。これらの諸氏族は、繼体～欽明朝の動乱期において、繼体・安閑・宣化を支持していたと考えられるが、宣化の上殖葉皇子と火焰皇子を祖とする偉那公・椎田君が勝福寺北墳と同じ後の摂津国川辺郡に居住していたことは興味深い。一方、雲雀丘C北4号墳の属するA形式は、この頃進行していた畿外の屯倉設置地域に分布するが、雲雀丘C北4号墳の被葬者もこれを担っていた中央氏族との関係が考えられる。長尾山丘陵では両古墳以降6世紀中頃～7世紀前半の群集墳形成期には両袖式の異なった形式の横穴式石室構築されるが、当丘陵における両石室の特異性や両石室間の相違点は、以上のような状況に起因するものと考えられる。また、勝福寺北墳の周辺には以後古墳が造られず、雲雀丘C北4号墳の周辺に群集墳が形成されることとは、両古墳以後の政治情勢を反映するものかもしれない。

(1991.3.1)

<註>

- ① 白石太一郎「日本における初期横穴式石室の系譜——横穴式石室の受容に関する一考察——」(『先史学研究』5 1965)
 - 〃 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考——河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として——」(『古代学研究』42・43 1966)
- ② 河上邦彦「大和の大型横穴式石室の系譜」(『権原考古学研究所論集』6 1979)
 - 〃 「大和の横穴式石室の概観と二、三の問題」(『権原考古学研究所論集』9 1988)
- ③ 北垣聰一郎「横穴式石室構築技法の一考察——特に大和を中心として——」(『権原考古学研究所論集』6 1984)
- ④ 森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜——畿内型と九州型——」(『古代学研究』111 1986)
 - 〃 「畿内大型横穴式石室考——後期古墳時代・畿内型A類の様相——」(同志社大学考古学シリーズⅢ『考古学と地域文化』森浩一編 1989)
- ⑤ 山崎信二「横穴式石室構造の地域別比較研究——中・四国編——」 1986
- ⑥ 岡野慶隆「横穴式石室の平面企画について——長尾山丘陵の横穴式石室を中心として——」(『関西学院考古』6 1980)
- ⑦ 〃 「横穴式石室の平面企画についてⅡ——畿内における主要横穴式石室の検討——」(『関西学院考古』8 1987)
- ⑧ 〃 「長尾山丘陵における横穴式石室——その企画法と構築技法——」(『市史研究紀要たからづか』6 1989)
- ⑨ 木村次雄「摂津の鈴鏡出土の古墳」(『考古学雑誌』19-11 1929)
梅原末治「摂津火打村勝福寺古墳」(『日本古文化研究所報告』1 日本古文化研究所 1935)
亥野 疊 『川西市史』第4卷考古資料 1976

- ⑩ 須恵器の編年は、田辺昭三『須恵器大成』角川書店1981による。
- ⑪ 白石太一郎 前掲書 (1966)
- ⑫ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群」Ⅱ (『関西学院考古』5 1979)
直宮憲一「宝塚市雲雀山古墳群C北支群4号墳出土の須恵器」(『関西学院考古』6 1980)
- ⑬ 森下浩行 前掲書 (1986)
- ⑭ 白石太一郎 前掲書 (1966)
- ⑮ 森下浩行 前掲書 (1989)
- ⑯ 玄室高を玄室幅で割った数値を「玄室高比」、羨道幅を玄室幅で割った数値を「羨道幅比」、羨道長を玄室幅で割った数値を「羨道長比」とした。
なお、構造面では、袖部の構造以外に羨道床面が玄室より一段高くなるものがある。この構造についても分類すべきであるが、未調査の石室が多いことや、調査例でも閉塞施設との判別が困難な場合が多いため、今回は除外することにした。
- ⑰ 尾崎喜左雄『横穴式石室の研究』吉川弘文館 1966
柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開——平面图形と尺度について——」(『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会編 1975)
- ⑱ 泉森皎・河上邦彦ほか『天理市石上・豊田古墳群』I 檜原考古学研究所 1975
- ⑲ ウ 『天理市石上・豊田古墳群』II 檜原考古学研究所 1976
- ⑳ 田中一広「巨勢山古墳群タケノクチ支群発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概要』1983年度 檜原考古学研究所編 1984)
- ㉑ 西谷 正「藤の森・蕃上山二古墳の調査」(『大阪府文化財調査概要』1965・66年度 大阪文化財センター 1975)
- ㉒ 檜原考古学研究所「新沢千塚古墳群—221・224・225号墳—現地説明会資料」1990
- ㉓ 上田宏範・北野耕平ほか『大和二塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第2冊 奈良県教育委員会 1962
- ㉔ ただし、玄室前壁・奥壁の持ち送りは、B形式の物集女車塚古墳に類似している。
- ㉕ 河上邦彦『市尾墓山古墳』高取町教育委員会・檜原考古学研究所 1984
- ㉖ 大阪府教育委員会「八尾市高安群集墳の調査 第2次」(『大阪府文化財調査概要』1967 1968)
- ㉗ 金 基雄『百濟の古墳』学生社 1976
- ㉘ 直木孝次郎「継体朝の動乱と神武伝説」(『日本古代国家の構造』青木書店 1958)
- ㉙ 林屋辰三郎「継体・欽明朝内乱の史的分析」(『古代国家の解体』東京大学出版会 1955)
- ㉚ 河上邦彦 前掲書 1984
- ㉛ 『日本書紀』欽明天皇17年7月に、蘇我大臣稻目が備前児嶋郡に屯倉を設置するにあたり、葛城山田直瑞子を田令とする記事がある。また、瑞子は同30年4月の白猪屯倉関係の記事にも見える。
- ㉜ 『日本書紀』宣化天皇元年3月「立_ニ前正妃億計天皇女橘仲皇女_ニ為_ニ皇后_ニ。是生_ニ一男三女_ニ。……
…次日_ニ上殖葉皇子_ニ。亦名椀子。是丹比公・偉那公、凡二姓之先也。先庶妃大河内稚子媛生_ニ一男_ニ。是日_ニ火焰皇子_ニ。是椎田君之先也。」